

◆海員随想

戦後日本の食糧支えた母船式漁業 興隆期の記憶をたどる⑥ 清水 陸明 当時は、通信長
【北洋の母船式】

北洋における母船式漁業船団にはサケ・マス船団、タラバガニ、カレイ、大鰾、タラ、スケソ、鰈漁業船団、さらにスリ身ミール船団や北洋捕鯨船団等があるが、ここでは昭和三十年代から四十年代のサケ・マス船団の通信業務を、すでに遠くなった淡い記憶の中からとりあげてみる。

対内地通信は主として JFA（船橋中央漁業無線局）経由で、各社各様式で行われている。

漁獲量は国際条約で定められた総量（トン数）から各船団に等量配分、日々の漁獲量は乗船監督官によりチェックされる。従って各船団は割当漁獲量を、より付加価値の高い魚種を多く、一日でも早く（一日の事業経費は大きい）達成すべく厳しい競合が展開されることになる。

①中期における出漁 7 船団の構成

日魯系列 3 船団、大洋系列 2 船団、日水系列 2 船団。

所属する独航船は 1 船団 33 隻（3 隻は調査専門に充当）。

②船団は日米加三国漁業条約で定められた海域（ソ連邦の 12 海里外）を各社協議で細分化して、各区画毎に記号を付して漁区と称して、自船団の当日操業漁区を、当日の 7 時から当番船（当番船は副当番船＝期間を定めて持ち回りとなる）に申し入れ（これを漁区宣言という）、当番船の了承を得る（入り合い混戦を避ける）システムとなっている（漁区宣言は早い者勝ちである）。

各船団 3 隻の調査船は、それぞれ指示された地点における漁況（揚網反数～1 反は約 50m～魚種別羅網率等々の情報）を暗号化（マス式、乱数、文字変換器等、各社各様）して 3 時頃から母船に打電され、母船漁労部（以下司令部と称する）の当日の操業漁区決定の参考資料となる。

③独航船は出身母港別や気脈を通じ合う仲間で構成する複数グループがあり、同じグループは必ずしも同一船団に属しておらず、各船団に分散しており各グループごとに漁況情報連絡が暗号様式（各グループごとに異なる）で行われ、自船の漁獲アップの資料収集に努めているが、実際の操業海区は母船司令部によって宣言決定されることであり、母船ではこれらの情報の提供を受けることになるが、各グループの交信時刻もほぼ同じ時間帯であり、直接傍受することにより（より早くより多く入手するために）、この時間帯の無線室は多忙を極めることになる。

司令部ではこれらの資料を、分析整理して当日の操業漁区の選定、さらに翌日の操業予定漁区をも勘案して独航船からの漁獲物の受け入れ地点まで想定して、7 時には（漁区宣言）をする必要に迫られることになるため、無線室ともども緊張の時間帯となる。かくして他船団に先駆けて帰途につく時の達成感は、またひとしおのものがあつた。

④サケ・マス船団だけは所属独航船の数も多く、通信機器（レーダーも含め）は統一されておらず、修理に際しては母船乗船の通信機器メーカー派遣の技術者に任せられている。

⑤もちろん船団事業はひとり司令部だけで遂行できるものではなく、先に述べたように脇役陣の活躍は欠かせないものであり、われわれもその一翼を担い得たことは幸せであつたと思っている。

⑥各船団の母船の通信士は7～8人、中には9人のところもあったようである。

事業船であればこそ旧式ではあるにしても、九九式電波探知機から始まって故障だらけではあったが、輸入品レーダーから国産新型もいち早く装備、テレプリンターやらボイスレコーダー（中短波帯音声変換器送受信機）等々、常に時代の先端を行く装置に接して、技術力を向上させてもらったこと。

海員組合の職場委員として3年余の陸上勤務も懐かしい。

その他、鉾油兼用船10万総トン（15万重量トン）の新造船艀装、1年間日本に帰ることなく三国間輸送業務についたこと。この時、当社初の女子船員2人（司厨部員）を同行して、1年間の三国間輸送に従事したことなども思い出されるが、海上生活から離れてすでに20年、傘寿も間近となりそろそろ認知症が気になるこの頃では記憶の正確さが心配されるが、誤りあればご寛容の程を。

「海員だより」